

# Midnight Press

2008年夏、いま、詩はどこにあるか？

近藤弘文 清水あすか chori 須永紀子 上田假奈代 タケイリエ  
小林レント 柴田千晶 久谷雉 ヤリタミサコ 桑原滝弥 中村剛彦

EXTRA  
2008 夏



とは幸せなことだから。  
ところでさつきすれ違った若い女いいケツしてたよな、と後ろの巡査に振り返りウィンク。

と、「ここで夢から覚めて、なんだ夢オチかよと多少がっかりする。

と、がっかりしているのも実はまだ夢の中で、さらにながかりする。

と、そんながっかりをあと7、8回繰り返したらシャワーを浴びたい。

屋過ぎの住宅街には工事現場の鉄骨を打ち付ける音だけが響きわたり、何もしないで三日間くらいぶつ通しで聴き続けたら連続通り魔になれる。気がする。

結局おれはまだ何もやっていないのだから、或いは、今生。

何もしていないことだけが人生なのかもしれない。

でも何かがしたい。何かがしたい。何でもいから何かがしたいよね。

昔警棒で殴られた古傷が痛むが、それは夢のせいにしておこう。

おふくろが小さくなったのは本だから、電話をする。

詩は元気で、と。

## すべての沈黙に詩はある

中村剛彦

思い出す。そして開いた膝を両手で支え、今一度、立つ。  
切迫した問題に直面したとき、世界中の全ての人間の心の傷口から、無言の言葉が。いまこの一秒が過ぎる間に、モンゴルの草原で、アラスカの氷原で、パレスチナの砂漠で、あるいは東京の地下街で、危機に瀕した無言の言葉が叫ばれている。  
この、あまりに人間への不信に満ちた時代に、そうした他者の無言の言葉を引き受ける者は現れるのか。私は、私自身に寄り添い、自ずとれてくる無言の言葉を結晶化してくれる者を求める。そして必然、あの戦争を生きぬいた詩人たち、開国の時代を命がけて駆けた詩人たちへとリつく。なぜなら彼らには、高度化した現代詩の知性が根底的に疑念を抱きつづけている、詩への盲信があるからだ。破壊を予感しながらも、決して花の咲かない土地に震える手で水を与え続ける、滑稽で悲劇的な、しかし栄光の盲信が。いま、私の眼前には、虚栄の都市に舞う蝶のとき言葉が、咲き乱れはじめて

切迫した問題がある。ふとした瞬間にバランスを失い、目眩をおこす。いつしか無窮の時空間に放り出される。全てが虚数に満ちてしまう。必死に私は愛犬を思い出す。必死に愛する人の顔を

Midnight Press EXTRA 2008夏 2008年7月13日発行 編集発行人 岡田幸文 発行所

## おや「一字不明」、川へはいっちゃいけないいたら。

近藤弘文

はじめて詩というものにふれた経験を思いおこしてみると、中学が高校かはずきりしないのだが、おそらくその頃の教科書に載っていた宮沢賢治の童話・オツベルと象・に思いあたる。自分に詩というものを気がつかせてくれたのが童話だというのなんだかおかしな話ではあるけれど、とにかくこの童話に自分とはとても驚いた。もっと正確にいうと、この童話の最後の一行に自分の世界がぐらついたのであった。

おや「一字不明」、川へはいっちゃいけないいたら。

この箇所には括弧がつけられていない。ちゃんとした脈絡もなく、だれの声なのかわからない。物語の外にはみ出してしまっているだけかの声。

ここを始めて読んだとき、「え？なにこれ？こんなってありなの？

さんたまりあ・と昏倒しかかった。その後、何度も読みなおしたがやはりわからないままだった。誰かにきいてみようかと思ったが、誰もこたえてくれなさ

うな予感がして、このことはそのまま、胸のうちにしまいにされた。

いま、詩はどこにあるか。思うのは、きつといまもこれから、

詩は・いまのわたしたち・という物語の

・執筆者プロフィール

近藤弘文 1976年生まれ。詩集『夜鷹公園』清水あすか 1981年生まれ。詩集『頭を残して放られる』chori 1984年生まれ。詩集『chori』須永紀子 1956年生まれ。詩集『中空前夜』上田假奈代 1969年生まれ。詩集『真夜中』タケイリエ 1975年生まれ。詩集『コンパス』小林レント 1984年生まれ。詩集『いがいが』柴田千晶 1980年生まれ。詩集『セラフィタ氏』久谷雉 1984年生まれ。詩集『ふたつの祝婚歌のあいだに書いた二十四の詩』ヤリタミサコ 1956年生まれ。TOKYOポエケット主宰。

桑原滝弥 1971年生まれ。詩集『花火燒』中村剛彦 1973年生まれ。詩集『壇の中の炎』

★ミッドナイト・ヴォイス「詩の雑誌Midnight Press」が休刊して、二年半が経過としていた。この、短かいようで長い(長いようで短かい)Intermission(にあって、僕はいつも詩の現在)を生きていた。それは、一方で、詩の核がよいよ見えなくなる現在でもあった。だが、核が見えなくなることが悪いことかといえ、一概にそうとはいえず、この龐大な無／拡散を深く潜行することを愉しむ選択があるように思われる。いまは、性急に、求心的に生きている時ではない。どれだけでもこたえられるか、その力が問われているのだと思う。■五月某日、渋谷で桑原滝弥とあれこれと話した。そこで、今回のTOKYOポエケット参加、そしてMidnight Pressのフリーペーパー発行というプランが生まれた。Midnight Press 休刊中のミッドナイト・プレスが、いまTOKYOポエケットに参加する積極的な理由はあるのだろうかと自問しないではなかったが、桑原と話

ミッドナイト・プレス 埼玉県和光市白子3-19-7-7002

外にあるということ。詩の書き手たちは空虚なる現在・という安易な物語の外からの声を聴こうとする。そこで、そのともに生きていこうと思わせるかのよう、あたたかい不意の一撃としての、詩にであう。詩はいつでもそこにある。

## 進化する、の出所

清水あすか

子どもの言葉にはっとするのは、環境や歴史にまだそれほど影響を受けずにいる。新しいまま、を見たときだ。もともとも進化している存在、子どもの可能性は常に、常に未知である。何かがあるのかまだ見えない、それはどこまでも大きな力だ。

しかし進化、とは・良くなっていくこと・ではない。良いかどうかは後に下る評価で、変化していく、その営みを表した言葉だ。

だから本当は、若者である私も、そこに座る年よりも、犬と歩くおばさんも、今変化している存在として、常に進化している。次に何を見るのかわからないし、何を言うかわからない。何が起きるのか、何をすべきか、未知。でも実際は大抵、あの人はいつもそう・いうことをし、毎日はいつもこんな・感じた。

しかしその・いつもの・間に、何が起ったのかかわらない一瞬で、世界が少しだけ動くことがある。また元に戻り、何も変わらない。いや、大きく変わってしまった。私が！ そんなことは、確かに、ある。

しているうちに、Midnight Press のフリーペーパーをつくらうという気持ちになった。それは、「詩の新聞Midnight Press」を編集発行していた時代を思い出すことでもあったが、過ぎ去った時間を懐かしむものではなかった。詩の明日へとつながる未来の時間をいかに生きるかと考える時間であった。今回、力のこもった原稿を寄せていただいたみなさんに感謝します。いっだって、詩は「いま、ここ」にある。また、いつかお会いしましょう。(岡田)

ミッドナイト・プレスの近刊詩集

浅野言朗 2/64窓の分割  
笹原玉子 この焼跡の、ユメの唄  
里中智沙 手童のこゝろ

ミッドナイト・プレスのHPでは、「今週の詩」を毎週更新しています。  
www.midnightpress.co.jp

詩人のSNS「なにぬねの。」  
現在稼働中

「月刊 桑原滝弥 8月号」  
製 裏  
8月2日(土) 開場19:30 / 開演20:00  
出演・岡田幸文 (Midnight Press 編集人)、  
桑原滝弥(詩人)  
料金・予約2000円 / 当日2500円  
(飲食代別)  
会場・mastr room lounge (渋谷神宮前)  
TEL 03-3400-1188 http://www.mado.in  
問合せ・桑原(詩人類) TEL 090-8545-2708

そのずれをもちたらず目、それが詩の力だ。今まで見えなかったように世界を見せる目、それは世界を新しくする可能性である。では誰がそんな目を持っているのか。

次は何を思うのか、感じるのか、何を書くのか。夕方には？ 朝には？

それは今も変わり続けている、私たち、そこに詩は、いつもある。

あ、今、見ている。

## 本質的な生々しさのなかへ

chori

はじめに、ぼくにとって身近な詩とはあくまでポエトリー・リーディングやその場であり、まちなかでふれられる感情やおどろきであって、自室で綴られるそれではないということをはっきりさせておく必要がある。そのうえで、いま、詩はどこにあるか・と考えるのだが、どうにも要領のよい答えをさぐりあてられそうにない。強いてもっとも近い感覚をひねり出すならば、あるひとははじめてマイクに向かってこぼを発した瞬間。または長いあいだステージに立ちすぎて、ついにそれが仕事や家庭などと並んで生活の一端になってしまったひとたちの未来、ということになるかもしれない。ことりーディングの場において、詩は、詩人なくして成立しない。それは著作権とか著作者人格権とかそういう・けちな意味ではなくって、骨格や筋肉をもったことばに最終的に血をかよわせるのは人間だということだ。その血圧や分量、偏

## ■2008年夏、いま、詩はどこにあるか？

りや血液型によって、ことばは怒りっぽいじいさんにもなるし、青白い顔をした少女にもなる。導火線のみじかい人間がけんめいに冷静さをたもとうとしている場面は一種滑稽さをともなっていておもしろいし、他人に興味のない人間が必死に誰かとつながろうと叫ぶ姿もまたうつくしいとおもう。どうやらまとまらないまま紙数が尽きそうだが、いま、ぼくにとつての詩は、リアリティという概念とは関わりなく、人間のもつ本質的な生々しさのなかへもう一度その触先をむけようとしているらしい。

## 負の体験と世界と

須永紀子

いま、詩はおそらく次のような書き手の作品のなかにあるのだろうと思います。・この時代に生きて、詩を書き、公開するということに自覚的である。・個人的な挫折や敗北の経験、自分にとって重要と思われるできごとを手放さず、それについて考えつづけている。・つねに世界に目を向けている。

・見る・ことは・知る・ことであり、さらに・思う・ことにつながっていきます。現在、あるいは過去の、集合体としての経験についても、チャンネルを合わせる必要があるでしょう。いま世界で起っているさまざまな問題について、いくつかの悲惨な戦争について、関係ないというのではなく、知ろうと努めること。それはおそらくそのまま詩になることはないけれど、何らかのかたちで、作品に組

み込まれていくことと思います。負の経験と、いまここにいる主体としてのわたし、そして世界。その回路を行き来しつつ書くことが必要なのではないでしょうか。

すぐれた詩の書き手は、現在を全身でキャッチしていると思います。何が起こつても・見る・ことと・思う・ことをやめないでしょう。彼らのなかに、詩のいまと未来があると信じます。

## 釜ヶ崎・暴動の夏

上田假奈代

2008年6月15日の今日は釜ヶ崎暴動五日目。テレビなどではあまり報道されていないが、釜ヶ崎では投石、放火が起こり、何百人という機動隊が並び、まちは封鎖されている。ところどころむき出しになった地面。はがされたブロックが機動隊にぶつけられる。深夜3時をすぎた日もあった。すでに何十人も逮捕者、負傷者がでている。

釜ヶ崎暴動は15年ぶりだと聞く。見下されてきた釜ヶ崎の労働者たちの怒りが火種だと聞くが、真相はわからない。そんなことは無関係にともかく夜になると、地域外から男たちがやってきて騒ぎはひどくなる。機動隊の盾のむこうは指揮官に従う若者であり、花火を放ち投石をしている若者と年頃もそう変わらないはずだ。

ここにあるのは、あらゆる気持ち。暴力のための暴力だ。放水車が水圧の水を飛ばし、人がぶつ

普遍的だと思われていた物語の解体が明らかとなり、小説はその姿を多様化・局所化させてゆく。文芸批評も、もはやどんな小説が書かれようがある程度の需要があるということを認識している。純文学はケータイ小説を無視できないし、キャラクター小説の支持者は私小説を無視できない。よくも悪くも相補的に自らの立ち位置を決定してゆく。

とりあえず文芸らしい詩はそのような言論空間にほぼ不在と言っている。いわゆる教養としての詩が失効したあと、文学の限られたジャンルとしか問題意識を共有できない状況に現代詩は自らを置いている。

詩は外需のほとんどない文芸だ。それはそれでかまわない。しかし、そのような消費に曝されないことに安住する言論の状況には違和感があった。詩はその不在、外部性を逆手にとるパルチザンでありえているか。詩のフィールドをもうすこしメタな視点で見なおしたいと思っている。

## 詩の出口

柴田千晶

ふと考えてみると、しばらく詩を書いていない。同人誌・No.1・15号・2006年5月発行・に・汐まねき・という長い散文詩を発表したが最後だから、もう2年以上詩を書いていないことになる。その2年間で約600句、俳句を作っていた。

・あなあなあなたのセックスは、益

とぶ。

ここにはないのは、想像力だ。暴力のための暴力ではなにも解決しない。そもそも解決のために集まっているわけでもなさそう、いったい何なのか、と思う。そしてなぜ、このまちが暴動を引き受けなければならないのか。わからない。

騒ぎの片隅で、絵描きの友達が見えた。小さなスケッチブックに描き込んでいる。駆け寄ってのぞくと、暴動の様子を描いている。ハツとした。ここには石を投げ罵声をあげる以外の表現の仕方がなかったからだ。この光景を目にやきつけておこう。詩を書こう。この現実には無力で、そのなにもなさで書く。

## 詩を書き続けるまえに

タケイリエ

すべてがぬるいゼリーみたいな国では、人々の副業は評論家である・とうぜん私も。あたまのなかで世界を転がす愉しみが、ひとりこのように寂しく立ち続けるのだ。ほろんでしまった戦後に、神さまは降りることなくテレビに映る某という男の身体を借りて語り、男は人間の言葉に訳す。それをばくだいなお金に変換するばくだいな大人もいる。幼稚園児の夏の弁当に梅干しを入れる。味付け海苔でアンパンマンの顔など描いている場合ではないと思う。キャラクター弁当に労力を注ぐ愛情深い女と話をするとき、なにかが間違っていると思う違和感が、私をかきたてる。白飯に梅干しを埋める才

はともかく、どちらの立場につくにせよ、**・停滞・**が忌むべきものであるという認識は共有されているようである。

・ここに歴史が停滞して頹廃に入りかけた時代に、すぐれた人が出る。漢の鄭玄、清の段玉裁、王念孫、日本の宣長、みなそうである。

中国文学者の吉川幸次郎が一九六二年に発表した・読書力について・という随筆の一節を引いてみた。吉川氏によれば言語を著者の心理に立ち入って把握する能力、すなわち、読書の学・の能力は、ゆっくりとした時代にこそ高まるのだという。もしも日本の詩の歴史に・停滞・の時間があったとして、果たして日本の詩の歩みをおおきな視野でふりかえる力に長けた人材がどれだけ生まれてきたのか。また、生み出しているほどの・停滞・だったのかどうか。詩の・停滞・について語る

とき、**・停滞・**そのものの糾弾、あるいは**・停滞・**というレッテルを貼ることに対する糾弾・よりも先に、詩にとって・停滞・とは何かを、本当に忌むべきものなのかというレベルから、はっきり質しておかねばなるまい。もしかしたら・停滞・こそがいまの詩に求められている、あるいは**・停滞・**の中にこそいまの詩のころぞすべきものは生きている、という結論さえ導きだせしてしまうかも知れない。

## 詩の強度を考える

ヤリタミサコ

・境界の意識・黙っていると自我が侵されてくるこの情報化社会において、自分と世間と、自分と他人との境界を確

マジナイをするとき、このような発想で書かれた詩ならばおそらく庶民にも食べられるとひらめく。わたしたちは芋や豆を食べ、田畑を耕し子を孕みつづける一生が予定されていた。病におびえるその日暮らしのために、子を間引き、親を間引いて捨ててゆく一生とは、もはや関係なく生きていく。・忙しいから・と言って、買ってきたものを堂々と食べる。そうやって稼いだ時間で詩を読み、詩を書くことは恥ずかしいと思う。詩を書く以前に、やっつけるべき日々のちいさな仕事が全員集合し、山になっている。子どもも弁当に梅干しを埋めるのも、その山のうちのひとつだ。そして、その梅干しが外注品・であることに後ろめたさを感じながら、日本の、女である自分は、詩を書き続ける。

## 詩界の外側で息をして

小林レント

一年ほど、詩誌や詩のウェブサイトを意識的に視野にいれずに暮らしていた。詩にまつわる言論内部での生活のなかで、詩人自身が詩を消化してゆく。そこに限定的に生じている言説にリアリティを感じられなくなり、浸りきっていた自分を洗いなおしたかった。そしてそういうメディアから離れて感じたのは、ほんとうにこちらから内部・に向かない限り、現代詩の状況なんてさっぱりわからないということだった。というわけで、現在わたしは自分の詩の姿以外をほとんど知らない。

固としておくことは困難。意識と無意識、社会と個人、自己、これらは対立概念ではなく相互に不連続する連続で、かつ包含関係でもある。曖昧にみえるが明確に認識される境界を意識すること。

・個人的なことは政治的・フェミニズムでは、個人を政治にせよ、と主張してきた。身体や感情、これらは個に回収されてはならない。家族内の力学も病理も家族という個に回収されてはならない。政治的であれ。個人の問題は社会問題である。実存は社会である。実存を追及すること。

・知で理であること・感情はどんな動物も表現する。が言語を使用する表現には悟性が必要。感覚の垂れ流しとそれに伴う自己満足は消滅させよ。単なる模倣や偽装建築のような偽装詩を追放せよ。知と理を明晰に活用せよ。

・個で孤・孤立を恐れてはならない。個であることを追求すれば甘ったるい孤独を突き抜けた地平に出る。安易なうわべのやさしさや癒しのようなその場しのぎは捨てよ。厳しく自我を屹立させよ。

## 元気です

桑原滝弥

田舎のおふくろが小さくなった。もともと小柄な人だったが、年を取り余計に小さくなった。近々実家に顔を出さなきゃな、そんなことを考えながら警官に追われている。追跡から逃げさせるためには、自分自身も警官隊の一員であると錯覚するにかぎる。何であれ追いかけるものがあるということ

## ■2008年夏、いま、詩はどこにあるか？